

## 資料と公共性 : 2019年度研究成果年次報告書

岡崎, 敦

九州大学大学院人文科学研究院 : 教授

藤川, 隆男

大阪大学大学院人文科学研究科 : 教授

市澤, 哲

神戸大学大学院人文科学研究科 : 教授

松田, 陽

東京大学大学院人文社会系研究科 : 准教授

他

<https://doi.org/10.15017/2557155>

---

出版情報 : 2020-03-06. 九州大学大学院人文科学研究院

バージョン :

権利関係 :

## フランスにおけるアーキビスト養成：過去、現在、未来

オリヴィエ・ポンセ（国立文書学校、パリ PSL 研究大学）

（岡崎敦・訳）

「統治すること、それは予見することである」。これは、19世紀フランスのジャーナリスト、デュポン・ド・ビュサックが1834年に述べたことである。しかしながら、その百年後、フランスの政治家、ピエール・マンデス＝フランスが正当にも指摘したように、「統治すること、それはまた選択することである」。いつでもどこでも、公権力は、みずから引き受けた使命を、最良のやり方で果たすことができる役人たちを確保せねばならないが、その成否は彼ら役人たちの採用時にかかっている。また、役人たちは、現在のあらゆる諸課題に向き合い、将来にも適応できねばならないが、未来の状況は採用時に予見されるものである。このような野心的な人事が実現されるためには、採用される人間たちが持っているべき専門性が、きわめて明確でなければならないし、また、その専門性が学問的・技術的両面にわたる幅広い基礎の裏付けを有している必要がある。

ずっと以前から、アーキビストの職務は、公権力の発展と本質的に並行するものと考えられてきた。公権力が、都市共同体、帝国、王権、共和政、あるいは端的に国家など、どのような形をとろうが、ことは同じである。また、文字が人間と財産の統治の道具となって以来、アーキビストの職務は、文字の普及とも関連してきた。しかしながら、この仕事に専門的に関わる専門職を、アド・ホックに（そのためだけに特に）養成するという考えが現れたのは、人類の歴史全体から見るとつい最近になってのことである。フランスでは、このような関心事は、19世紀はじめの約30年間に生まれたが、それは最初にふれたデュポン・ド・ビュサックが活躍していたころのことである。そのころ、この国はなお王政であったが、フランス革命によって、政治的・行政的実践は大きな変化を被っていたのである。アーキビスト専門職の養成という考えは、独自の制度、つまり文書学校というかたちで具現化されたが、文書学校は、当初はそのようなものとして構想されたわけではなく、アーキビスト養成のミッションは、きわめてゆっくりとかたちをなしてきたにすぎない。ある意味では、文書学校によってアーキビストが養成されたというよりも、アーキビストたちが文書学校を（再）構築したとすらいえる。

よきアーキビストとは何か、アーキビストが現在および未来の課題に首尾よく応えるためにはどのように教育すべきか、という問いは、過去200年にわたって、フランスのあら

ゆる権力者を悩ませてきた。この問い自体、固有の歴史を持っており、歴史的に変化するとともに、つねに流動的であったアーカイブズの定義とも密接な関係にある。アーカイブズについては、ここでは、資料、およびその保存の責任を担う組織の両方の意味で使用するが、フランス語でこの用語は、長らく、この2つの意味で用いられてきたのである。現在、「アーカイブズ」という用語を維持することが妥当かどうか問われているが（Banat-Berger, Nougaret 2014）、それでは「アーキビスト」はこの先消滅するのだろうか。同時に、現在および未来のアーカイブズ生産の管理を担う人材を養成する、という幻想もまた消え去るのだろうか。

この報告を行っている当人はといえば、文書学校において、近世のアーカイブズ学を担当する教授である。まもなく創設の1821年から200周年を迎える、このフランスの高等教育施設は、2世紀にわたって、国家文書館、県文書館、大きな都市の文書館の一部に勤務する専門職の大多数を養成してきたことを誇るものである。さらに最近では、フランスとともに、外国のアーカイブズ管理の専門機関に勤める非常に多くのアーキビストを輩出している。文書学校卒業生（シャルティスト）の見解は、アーキビスト養成に関する他の判断を排除するものではないが、どこよりも長い歴史を持つという利点はある。文書学校がこの間経験してきた野心的提案、ためらい、先駆的試み、あるいは遅れやずれなどは、それぞれ、フランスにおいてアーキビスト養成のために試みられてきたさまざまな道筋を表している。文書学校は、この問題に関し、将来なにが必要となるかについて考察する際にも、適切な観測所であり続けている。

## 1. アーキビスト養成 過去 (1) : 19世紀、分類の時代

アーキビストの職務とは、勤務する組織のレベルに関わらず、古典的には、フランス語では一つの同じ頭文字Cで始まる4つの動詞にまとめられる。すなわち、収集する *collecter*、分類する *classer*、保存する *conserver*、そして公開する *communiquer*、である。これらの諸活動を、優先順位および機能面で、どのように調整するのかは、時代によって判断が異なるが、それはアーキビストに求められる役割とも連動していた。

19世紀においては、長きにわたって、アーキビストの主要な仕事とは、資料の公開であった。というのも、革命の結果生じた資料の接取や移管の結果、膨大な資料が彼のもとにやってきたからである。しかしながら、求められたのは、資料の直接利用を容易にすることではなく、ほとんどの場合、行政上の調査や特定の歴史資料に関心を寄せる個人に対応することであった。当初は、アーキビストとは、資料と利用者を媒介する者以上ではな

く、いかなる専門教育も施されなかった。このころすでに、軍事や技官など、国家公務員専門職の養成のために、専門学校が創設されていたにも関わらずである。1820～30年代のアーキビストの出自は、印刷職人、ミシュレのような文人、ナタリ・ド・ヴァイイのような法学部出身者など、かなり多様であった。この二人は、この時代の代表的アーキビストであるが、19世紀こそ、ロマン主義的であるとともに、フランスのアーカイブズ学を生み出した時代であった。まず重要であったのは、資料を理解すること、つまり端的に言えばきちんと読めることであった。

1821年に文書学校が創設されたのも、このような認識のもとであった。初期の学生たちにまず期待されたのは、革命前にすでに着手されていた中世史料刊行事業への関与であった。古文書の研究のために必要な技術的かつ知的な能力一式を若い世代に伝えることが、新しく設置された学校の授業プログラムをなしていた。つまり、古書体学、文書学および書誌学がそうであり、それぞれ具体的には、古い書体解読の訓練、文書発給のための書式の研究、そして中世の言語と文体の読解である。アーカイブズ学それ自体、少なくとも、資料の伝達に関わる諸現象の理解すら、文書学校の教育には明示的には取り入れられてはいなかったのである。

しかしながら、国家はすぐさま、県文書館であれ、都市文書館であれ、地方の文書保管庫に積み上げられた大量の資料の山の処理に直面するようになった。1850年までは、県文書館でアーキビストの職を担った文書学校出身者の数は少なかった（Mollet 1993）。他方で、大量の古文書の整理のためには、新しい能力が必要であった。資料の研究や刊行に精通していても、現状に適切な処置を施すには不十分であることが明らかになったのである。そこで、分類すること（そして目録を作ること）が、20世紀はじめまで何世代にもわたって、公文書館アーキビストにとっての合い言葉となった。シャルティストは、かくして、資料の記述に重点を置く、この初期のアーカイブズ学を体現する存在として、素晴らしく養成されたのである。そこでは、資料の読解、年代決定、著者やテキスト伝来の同定などが、まずは分類作業、ついで多かれ少なかれ簡潔な要約の作成と刊行のための基礎能力とみなされた。そして、これらの作業自体が、先程述べた媒介者としてのアーキビストを無意味なものとした。歴史家は、アーカイブズに関する目録を使えば、単独で、媒介者を介することなく仕事ができるようになったからである。

1846年の文書学校の改革は、アーカイブズ当局との緊密な連携のもと、新しい野心的な試みとともに実施された。文書学校は、王立文書館内に移転し、校長は王国アーカイブズ長官が兼ねた。再度、書誌学の講義が設定され、その一部をなす「アーカイブズ分類」

の授業は、新学制では2年次に配置された。歴史に関する論文を卒業要件として作成した卒業生には、これ以降、区別なく全員に対して、就職先が文書館か図書館かにも関係なく、一律「アーキビスト＝パレオグラフ（古書体学者）」という学位が与えられることとなった。少し後になると、アーカイブズの問題関心をより広範にとり入れるという方向性を自発的に模索した結果、1850年には、政令によって、県文書館の専門職公務員は、以後文書学校卒業生が独占することになった。パリの中央文書館についても、1887年には同様の処置がとられた。この状態は、その後150年続くことになる。

一次史料としてのアーカイブズ資料の研究に基礎を置くようになった歴史学研究は、アーキビストによる資料の整理、分類、記述作業の恩恵を十全に受けることとなったが、事実、この時期アーキビストには、これらの作業以外はほとんど何も要求されなかったのである。アーカイブズ業務に専心することをミッションとする文書学校は、1875年に創設された政治学院とともに、第三共和政期には、行政役人の専門職を養成する数少ない専門学校の一つであった（高等師範学校と士官学校はもちろん存在したが）。元アーキビストで、文書学校ではフランス史に関する史料についての講義を担当したシメオン・リュースは、1882年に、以下のように述べている。

「文書学校は、歴史学の領域において、理工科学校やその他の特殊応用学校が数学領域で果たしている役割を担っている。実践と理論を結びつけるというこの学校の教育は、私たちの歴史の史料についての深い研究と、過去のあらゆる時代から私たちのもとの遺されてきた、あらゆる種類の資料の刊行を対象とする。この学校の目的は、資料に通じた者、特にアーキビスト、図書館司書、碑文アカデミー職員の養成にある。」（シメオン・リュース、文書学校フランス史資料講座教授、1882年）

文書学校は、実際のところ、当時まったく前例のない状況のもとにあった。というのも、この学校は、実践的・技術的教育の場であるとともに、古い大学教育の攻撃へと向かった一群の若き研究者の温床ともなったのである。シャルティストたちは、大学において教授職を占め、方法論的実証史学の体現者となったのである。新しい歴史学の偉大な概論である『歴史学序論』（1898年）は、二人のソルボンヌの教授の手になるが、その一人は、文書学校卒業生であるシャルル＝ヴィクトル・ラングロワであった。この黄金時代ともみえた現象は、実際には騙し絵のようなものであった。大学教員とともに、アーカイブズ管理の専門職を養成するというその地位が確立されたように見えた時期に、緊張感に満

ちた論争の時代がはじまり、その後長期にわたって続くのである。それはまた、歴史学研究とアーカイブズ管理の双方において、非常に大きな変化の時代ともなった。

## 2. アーキビストの養成 過去(2) : 20世紀、収集の時代

アーカイブズ学のなかでも、資料記述の領域は、文書学校で教授される歴史学方法論の準備課程に非常によく対応するものであった。他方で、アーカイブズ学の別の側面、行政組織における資料管理を、文書学校は無視していたわけではない。1880年代はじめにすでに、現用文書管理が授業の対象となっていた。しかしながら、この領域に担当教授職が割り当てられてこなかったのは確かである。この領域は、非常に実践的な問題に関わり、かつより現代的な資料管理や、資料生産の鎖全体の処理に関心が向いているのである。ところで、1890–1930年代は、西ヨーロッパ全般において、アーキビストとアーカイブズ資料の生産者との間の関係が大きく変容した時期であった。この時期以後、アーキビストのミッションを決定する役割について、行政が、かつて歴史家が持っていた地位に取って代わったのである。偉大なアーカイブズ学の概論、たとえば、オランダのミュラー、フェイスおよびフルイン三者によるもの（訳注。日本ではダッジ・マニュアルと呼ばれるもの）、イングランドのジェンキンソン執筆のものが著名であるが、これらは共通して、行政組織との協力関係こそが、資料生産の場でも廃棄の場でも、決定的に重要であると考えている。他方で、歴史家の関心事は二次的なものとなっていった。

これらの新しい動きのもとで、フランスでは国会での論争が持ち上がった。1904–05年に、アーキビスト養成を根本的に考え直し、より明確に職業教育化すべきかどうか問われたのであるが、他方、文書学校はといえば、1898年以来、象徴的にもソルボンヌの建物内に置かれていたのである。準備された法案においては、「国立文書学校は、国立アーキビスト・図書館司書学校と名称変更する」と規定され、カリキュラムには、「文書館および図書館の管理運営に必要な知識を含む全ての素材を含むこと」が命じられたが、ここで重要なのは、もはや資料の理解ではなく、管理運営に重点が置かれたことを示す用語法の変化である。文書学校側の反応はといえば、この両者のどちらか一方に偏することはしないというものであった。つまり、職業的であると同時に学術的な教育を施すという理念の堅持である。この二つの方向性をともに重要視すると主張した文書学校は、激しい攻撃にも関わらず、19世紀以来の組織にはほとんどまったく手を加えなかった。しかしながら、この勝利はごく短期間しか続かなかった。というのも、アーカイブズの世界において

も、歴史家の世界においても、あらゆる事態が、アーキビスト養成に根本的な変容を要請してきたからである。

アーキビスト養成に関する改革案が議論されていたころ、文書学校が体現していた実証的歴史学への攻撃が始まっていた。なかでも、1929年、『社会経済史年報』の創刊に至る動きは重要であり、そこでは、歴史をあらゆる境界を取り除いて研究することが追求された。そこでは、まったく未開拓のアーカイブズ資料の参照が求められた一方で、端的にアーカイブズ資料を使用しない研究も現れた。さらに、数年の間は、ことをやり過ぎせると考えていた文書学校は、1930年代はじめには、文書館および行政の世界の期待に応えないでいることは、もはやできないことを認めざるをえなくなった。図書館司書については、1932年に職業的な資格が生まれていたのに対して、アーカイブズ部門においては、文書学校がとりあえず卒業生のために作った卒業資格があつたにすぎない。1933年、書誌学とアーカイブズ学を再編して新しい講座が生まれたとき、その最初の担当教授となったシャルル・サマランは、より職業的な教育が必要とされている事情を完全に意識していた。しかしながら、彼は依然として、2つの仕事が異なる能力に対応すると主張し続けていた。つまり、研究者にはジェネラリスト的な幅広い教養が、実務家にはより技術的なものが、それぞれ必要であるというのである。

「私たちは、文書学校において、理想的なアーキビストや司書が長いキャリアを通じて学んでいくべきすべてを、教えようなどという途方もないことを考えているわけではない。逆に、私たちは、きわめてはっきりと、教えることは詰め込むことではなく選ぶこと、消耗させることなく示唆することであると感じている。全体が細部に、本質が付随的なものに、学問的精神の形成（一言でいうなら方法論）が仕事についての経験的な実践に先行すべきではある。しかしながら、文書学校が、現在まで、その力と栄光を紡いできた、これらの指導原理に忠実であろうとするなら、同様に、理にかなった限定のもとではあるが、アーカイブズや図書館に関する非常に複雑で流動的な諸問題において、技術や職業的な教育に関する、あらゆる事項を発展させることもまた望ましいように思われた。というわけで、アーカイブズの領域において、特に正規の教育を受けた県文書館アーキビストは、以前と同じく、歴史学方法論に関する授業を私のもとで学んだ後、彼らが私よりもよりよく知ることについて語るようになる。彼らは、近代行政の非常に微妙な歯車となりうるであろう。彼らはまた、経験を積んだのちには、どのように文書庫を管理すべきかについて語るができるであろう。この業務は、それを正しく

理解するには、関係する正規の規則を読んでおくだけでは、十分とは言えないのである。」（シャルル・サマラン、文書学校フランス史書誌学およびアーカイブズ担当講座教授、1933年）

新しい教育へと移るときが来ていたのである。実際のところ、あらゆるアーカイブズ管理行政は、分類から収集へと、組織の目標要件を変更させていたが、シャルティストたちが、自分たちが受けた教育の成果を発揮できたのは、もっぱら前者であった。当時、アーカイブズ管理行政 *archivéconomie* と呼ばれた時代が始まっていた（Delmas 2006）。両大戦間期に定められたさまざまな法や政令は、アーキビストの活動をフォンドの方向へ、つまり、自分たちが職務を果たしている文書館には必ずしも大量、良好に資料を送り込んで来なかった行政組織の側に拡大させていた。たとえば、1924年の法は、県知事が職権によって、保存状態が悪い都市文書館の資料を県文書館へ移管させることを認めている。1928年には、公証人文書という、量的にも質的にも非常に巨大かつ重要な資料の国家文書館への移管を定める政令が出された。さらに1936年の重要な政令は、省庁や中央行政機関のアーカイブズの移管のやり方を根本的に改正し、その後は、アーキビストが、資料の生産者側へ近づいて、文書館への資料移管を進める態勢が整えられたのである。他方で、アーキビストは、従来公的な文書館には入ってこなかったさまざまな組織の資料を受け入れるようになった。たとえば、家族や企業、団体などの私文書がそうであり、これらは、1938年に国家的保護の対象となり、第二次大戦後には、中央文書館のなかに、それぞれ固有の分類を与えられることとなった。

新しい歴史と新しいアーカイブズ学という表現は、まさしく1950年代のフランスに広まったが、この両者はともに、文書学校で伝統的に行われてきたアーキビスト教育とは調和しなかった。確かに、史料批判手続きを再考することは望ましいことであったが、国家、そしてなにより文書学校の未来にとって緊急であったのは、職業教育提供を再構築することであった。国家公務員である他の専門職と同様に、アーキビスト職もまた、発展する行政の専門化とその認知の進行に対応できねばならず、固有な領域における教育が待ち望まれたのである。かくして、1945年には副アーキビスト、アーキビスト職員、1960年にはドキュメンタリスト＝アーキビスト、文書館補佐、1978年にはドキュメンタリストのそれぞれ職階が制度化された。

文書学校伝統の学位コースである「アーキビスト＝パレオグラフ」教育プログラムに、新しい専門的・実践的な教育を直ちに組み込むことは難しいと考えられたが、救いは外か

ら、この場合には、アーカイブズ行政当局からきた。1949年、フランス・アーカイブズ総局は、この年以降、文書学校卒業生がアーキビストあるいは行政官としての勤務に、より直接的に対応できるように、学業の最終段階での技術的な研修制度を創設した。このより職業的な教育は、1951年には国際的な性格を有することとなった。というのも、この制度は、ヨーロッパを中心とする外国のアーキビストを受け入れるようになったが、参加した各国のアーキビストたちもまた、それぞれの国における現実の実践において、同じ不適合という問題を共有していた。研修は、当初3ヶ月の集中コースであったが、これは、文書学校学生が1963年に給与支給の公務員待遇となってからは、学校教育の延長として位置づけられ、1969年に学業年限が大学と同じになってからは、最終的に、最終学年の4年目の課程となった。研修では、行政組織訪問、実践的な実習、そして理論的な報告の3つが交互に課される。1954年から1961年までその責任者を務めたアルベール・ミロにとって、この国際的な研修制度は、アーキビスト養成全体の一部を構成するものとされた。つまり、文書学校を卒業するだけでは、アーキビスト教育は完成しないという認識なのである。

「アーキビストの養成は、3つの段階からなる。最初の2つの段階は、アーキビストが、文書学校を卒業して学位を得る前にある。第一段階は、文書学校の入学試験に合格しようと希望する者にとって不可欠な（中略）全般的知識をえる段階である。（中略）将来のアーキビストにとって、第二段階が始まるのは、文書学校への入学後である。そこでは、将来の仕事で必要とされる技術を楽し々と使いこなすための方法論と精神的態度が獲得される。

（中略）ところで、文書学校におけるアーカイブズ学教育は、2年目の1科目授業（週一回）、および県、市、病院文書館に関する補完的な授業で施されるが、ときにやや抽象的な、全般的な諸観念に関するものでしかない。アーカイブズの歴史、公的文書庫構成に関する諸原則、分類、目録作成、資料の公開、フランスの文書館の主要なフォンドの記述などは授業で取り扱われるとはいえ、テーマは多様かつ豊富であり、補完的な教育が必要とされる。そして、これこそ第三段階の対象であり、「文書館研修」によって構成される。具体的には、パリの中央文書館での3ヶ月の研修であり、これに県文書館での実践的研修が加わる。」（アルベール・ミロ、国際技術研修責任者、1957年）

この決定的に重要な時代を通じて、フランス、さらには世界のアーカイブズ学は、古くから存在したとはいえ、それまで使われたことがない用語で、当時初めて提起された問題に、正面切って取り組むことになった。管理すべき資料量の莫大な増加という問題であり、アーキビストにとっては、アーカイブズの重みに押しつぶされてしまうなかで、実践的にも理論的にも能力を発揮せねばならない課題であった。1956年、アメリカのアーキビスト、セオドア・シェレンバーグは、アーカイブズには一次的および二次的な2つの価値があると主張し、一世を風靡した。この主張自体は、七月王政期のフランスですでによく知られていた常識を、学問的省察として提示したものにすぎないが、この理論がアメリカ起源であったことが、ヨーロッパでの受容を容易にしたともいえる。というのも、そこではすぐさま、この理論の複雑化、さらにはある意味で「人間化」が行われたのである。アルベール・ミロは、この理論を翻案して、「熱い」、「ぬるい」、そして「冷たい」という三段階説を唱えたが、これは、シャルティスト、イヴ・ペロタンの影響のもとで、フランスにおいては（アメリカ理論よりも）優越するものとして受け入れられた。ペロタンは、アーカイブズの一生について、継続、時には共存する2つではなく、3つの段階があることを強調しながら、時間的な経過過程として示したのである。つまり、現用、中間、そして永続保存の3段階である。1961年にこのように提示された三段階説は、フランスではその後持続的な成功をおさめ、それまでフランスに限定されていた、ある実践の有効性を保証するものとなった。事前アーカイブズ化がそれである。この作業は、アーキビストが、アーカイブズ資料生産過程の早い段階に介入すること、つまり、最終的な保存庫という下流だけではなく、資料を生み出す行政が機能する場である上流で行われる作業である。1952年にまず内務省で試行され、1960年代から1980年代を通じて、すべての省庁部に次第に拡大していった。

この新しい状況は、確かに、それ自体としては、文書学校の教育の中に組み込まれてはいなかったが、両者はそれほど対立関係にあるわけではない。このことは、文書学校の伝統が、職業的な実践面にみられる多くの変化に対しても、適用する能力を保持していることを示している。ある制度の機能を理解すること、ある資料の文書としての生成過程を分析すること、法的なあるいは規則上の拘束の性格を評価すること、資料の相対的な価値を見分けること、アーカイブズの歴史的価値を事前に評価すること、これら専門性を要求するあらゆる諸課題は、19世紀半ばの改革以来、文書学校の教育プログラムを確かに構成してきたのである。文書学校の弱点、つまり、アーカイブズ国際研修受講の段階で受ける、より技術的な修練の準備過程として位置づけられている、文書学校の基礎教育が抱え

る弱みとは、より新しい時代の知識に比べ、圧倒的に中世の歴史に重点が置かれ続けてきたことであろう。これは、20世紀はじめ以来、定期的に投げつけられてきた非難でもあった（Aulard 1906）。実際のところ、この批判は、授業カリキュラムにおいても、卒業論文の主題の選択についても、正鵠をついていたといえる。しかしながら、第二次大戦後、次第に状況は変わっており、1957年には、ミシェル・フランソワが1789年から1875年、その後すぐに1940年の時期までを取り扱う授業を開始していた。フランスの大学全体を揺るがした1968年の事件の直後には、文書学校もゆっくりとではあるが変容し、1977年には小さいとはいえ革命的な改革が行われた。

歴史のさまざまな時期に固有の諸特徴を満遍なく考慮に入れることは不可能であるとはいえ、当時、すでに1961年に何人かの国家アーキビストが表明していた期待に応えようとする動きがあった。文書学校の教育プログラムのなかに、国際研修制度において教えられている理論的性格のいくつかの授業を組み込んでどうかという提案である（Monicat 1961）。そこで決定されたのが、従来テーマ別に編成されていた教育枠組みを、時代ごとに別々に振り当て直すというものであった。中世については、文書学校にとってほとんど代名詞となっている文書学が中心となる。近世はより明確に諸制度の歴史に傾注する、そして現代は、直接にアーカイブズ学そのものとしたのである（Delmas 1988）。この再編は、若干性急で、かつ戯画的な感じもしないではないが、実際には、対象とする時代の歴史的特性にしたがって、諸制度から文書学を通してアーカイブズ学へと連なる緊密な一つのブロックを分節化することを目的としていた。かくして、もっとも新しい時期についての理論的基礎研究の土台が築かれ、かなり早期に、現代を研究する学生の数が非常に増加した。これは、教員による教育改革が、学生の志向に合致したことを示すものである。

### 3. アーキビストの養成 現在：共有の時代

フランスにおいて「栄光の30年（1946–1975）」と呼ばれる時代を通じて観察されるアーキビストの役割の多様化は、どのレベルにおいても、資料生産の極度の増大に伴う現象であった。アーキビスト養成の必要性は、もはや国家権力の中枢のみならず、より下位の階梯の組織（県、都市、最近では地域圏）においても同様であり、これは1983–84年から始まった行政および政治機構の地方分権化の動きが加速させたものである。このような動きを越えて、情報やドキュメンテーション機能の重要性が全般的に認知されるようになったのは、公的・私的（部署、民間企業、団体など）を問わずあらゆる組織において認められることであり、その結果として適正な教育を受けた専門職の需要が高まった。全

体として、アーカイブズ管理は国家の事項だけではなく、非常に多くのアーキビストが必要となったのである。今日のアーキビスト養成は、量的および職業ジャンルの増加膨張がもたらした問題としてとらえねばならない。

この新しい需要に対してまず対応したのは、大学であった。最初に学位を発給する態勢をととのえたのは、ミュールーズ所在のオート＝アルザス大学で、1976年、「第二水準、つまり中程度の都市の都市文書館の管理を担当する都市アーキビスト養成のために」設立された。ついで、大学におけるポストの純増に対応するように、その他の教育機関も、さまざまな職種の管理職養成に乗り出した。必要な人材とは、公的のみならず、企業のアーカイブズ管理組織においても有用な仕事がこなせる人材であった。たとえば、リヨン第3大学では、1979年に学士課程（職業学位）が、1984年に修士課程が開設された。1980年から2000年にかけて、フランス全体で、アーキビスト養成に対応する大学での学位発給課程の数は、非常に増加した（現在約12を数える）が、学士、修士加えて、2008年には博士課程までもが設置された（アンジェ大学）。

並行して、国家は、文化遺産管理を担当する専門職についても、より明確に職業的、かつ標準化された教育に乗り出した（ただし、図書館については別で、先駆的にこの観点からの教育をすでに組織していた）。

真に体系的な性格をもったこの改革は、1990年、国立文化遺産学校の創設として結実した（その後、フランス芸術品修復機構を合体したのち、2001年には、国立文化遺産機構となった）。これは、国家の高級行政官あるいは司法官の養成を目的とする国立行政学院あるいは司法学院に類した、現場に適用した教育を授ける学校であり、おおよそ修士課程までのさまざまな教育を受けた大学学位取得者が対象となる。学業年限は18ヶ月であり、アーカイブズに関しては、すでに述べた国際的研修制度の役割を継承するものである。この研修制度は、時期を下るにしたがって重要性を失い、近年では、5週間の講演拝聴の状態に留まっている。ところで、国立文化遺産機構の登場は、一世紀以上にわたって、文書学校がアーカイブズの世界ととりもってきた特殊な歴史を、ある意味精算するものであった。というのも、アーキビスト、あるいはアーカイブズ保存官の役割を拡張し、アーキビストを、より多様な姿を持つ、文化遺産保存官に置き換えようとする志向が顕著だからである。文書学校の学生すら、（最高レベルのアーキビスト養成を独占する）この機構に自動的に入校できず、入学試験を受験せねばならない。2007年以降は試験自体も他の学生に開放されたが、アーカイブズ領域の学生のほとんどすべては、依然として文書学校の学生ではある。

この構造的な変化により、文書学校は、新しいアーキビスト教育システムのなかでの地位を再検討せざるを得なくなった。現代アーカイブズ学講座を担当する文書学校教授、クリスチヌ・ヌガレは、以下のような挑発的な表現で提起された課題に応えるよう招聘されたのである。それは、「文書学校は、いまなおアーキビストの養成校たりうるのか」という問いである（Nougaret 2007）。官僚主義的な統一化のために、文書学校が長らく独占してきた特権を放棄されるに至ったのだが、その結果はといえば、文書学校にとってはむしろ好都合であったともいえる。というのも、国立文化遺産機構は、実際のところ、文書学校の使命を損なっていないのである。1987年10月8日の文書学校再編に関する政令では、「文書学校のミッションは、文書館および図書館の専門職の養成、および文化遺産に関わるすべてのスタッフの教育に協力することにある」と規定されている。さらに、20世紀末まで一人しかいなかったアーカイブズ学担当教員が現在3名おり、文学あるいは歴史学を勉強している多くの学生たちは、アーキビストのキャリアを目指すかどうかに関わりなく、歴史的ドキュメンテーション論という独自のアプローチに触れることができる。現代アーカイブズ学は、アーカイブズ管理についての学問と考えられており、その教育は、文書学校の最終学年にあたる3年目に受講するよう設定されている。この授業は、資料管理のすべての段階に関する導入的基礎教育であり、アーキビストのキャリアを目指す学生たちは、その後、文化遺産機構における補完的な実践研修へと進むのである。2013年以来、文書学校は、従来3年に加えて、さらに一年の就学を制度化したが、これは、文化遺産管理組織で行われる研修実践を授業の正規プログラムの中に統合したものである。研修は実際には、フランス内外の文書館で実施されることが大半である。このように、現在の文書学校のプログラムにおいて、高いレベルの学問的授業に加えて、職業現場での研修が広がりを見せており、これはかつて考えられていたよりはるかに決定的な新しい展開をなしている。広い範囲にわたる教育と実践的な経験は、もはや時期的に分離された養成の段階としてではなく、相互に補完されるものと考えられている。2010年以降、文書学校では博士号も授与しており、多くの面から見て、ここでの教育プログラムは、より完全で満足すべきものとなった。

最終的に、文書学校は、アーカイブズ学に関する知識全体を教えるという意味では、いわゆる基礎教育にあたる部分を担っている、あるいはその部分をもっぱら担当しているといえる。そして、その根幹を構成しているのは、アーカイブズ資料の中長期的な管理という歴史的なアプローチである。実のところ、全般的に、大学教育におけるアーカイブズ学の出現も、まず歴史学部門で生じたのである。歴史学とアーカイブズ管理との間の緊密な

連携がフランスにおいて承認されているのは、おそらく 19 世紀から続く文書学校の伝統の故であろう。そして、方法論やノウハウ、実践を、常に現状に合わせて革新していく必要性が消えさることもなかったのである。第二次大戦以後に、フランスの行政機構全般で行われたことに対応して、アーカイブズ管理に関してもまた、現職者研修制度が、関係省庁の内部で実施されてきた。1976 年以来、文化省は、特別な部署を設け、文書館に勤務するさまざまなカテゴリーのスタッフを対象として、全般的あるいは専門的なレベルの数多くの研修を実施してきた。他方で、1904 年に創設され、1969 年に改組されたフランス・アーキビスト協会は、1984 年、パリに公式の研修センターを設置し、アーキビストの生涯教育のみならず、アーカイブズ管理担当者だが、公務員になる前には特別な教育を受けていなかった職員を対象とする、初歩的な情報提供も行ってきた。文書学校と文化遺産機構もまた、それぞれの授業プログラムが対象とするさまざまな学問領域に関して、現職の専門職が新しい課題や技術に対応できるように、学術的知識の更新や技術発展に関する教育を展開している。最後に、2005 年以来、オンライン教育が、フランス語圏アーカイブズ学国際ポータルを通じて提供されている。これは、全般的および技術的教育を約 165 時間にわたって提供するもので、その内容は、アーカイブズの基礎から、アーカイブズ管理部署の創設に係る問題に至るまでさまざまなモジュールに編成されている。そこで取り扱われている問題はといえば、たとえば、アーカイブズに関する規則、管理、保存、公開などである。そこでは、非常に長い間支配的であった、「現場の」経験則による教育が次第に放棄され、1950 年代にはまだ当たり前だったところですが、例外的になっていく様子を見てとることができるのである。もちろん、最高レベルのアーカイブズ管理専門職である国家保存官のポストは、このような現場主義の例外であったが（訳注。事実上文書学校出身者に限定されたポストで、幅広い知識が必須とされる）。

#### 4. アーキビスト養成、未来：アーカイブズ管理プロセスの基盤としてのアーキビスト

未来について考察する未来学は、サイエンス＝フィクション（虚構）ではない。実効的、有益であるためには、適切なかたちで問題が提起される必要がある。未来の自分を想像し、新しい仕事を開拓していくためにどうしても必要なものはなにかについて予見し、重要な事項を選び取るためには、原則的な観点に戻る必要がある。

アーキビストの仕事が、社会全体の中に溶け込む動きが進む一方で、この専門職全体は、ここ数十年の間、実践面でも、用語法の面でも、アイデンティティの明白な喪失という事態に直面するに至っている。意味深いことに、フランス・アーカイブズ総局が『アー

『アーカイブズ学概論』というタイトルで刊行した 1970 年刊行のマニュアルは、四半世紀後には、『アーカイブズ学的実践』という名前で編纂し直されたが、タイトルに付された用語の変化が示すように、アーカイブズ学が純粹科学であるとか、複雑な規則体系のもとにあるなどの論調は弱まり、かわって実務的側面が強まったといえる。デルマスがいうところのこの「懐疑の時代」とは、なにより、アーキビストに対する、情報学専門家による挑戦の時代であった。アーカイブズ化という表現が次第に優勢となったのは、ストックよりも流動性の重要性が増した環境のもとであり、アーカイブズの歴史人類学とでも名付けることができる事態への転換を表している。このこと自体、アーカイブズ管理責任者の養成にも影響を与えており、文書学校でも、2013 年には図書館情報学の授業が始まり、国立図書館との協定によって、デジタル・アーカイブズに特化した修士課程コースが運営されている。このアーカイブズのポスト＝モダン状況において、アーカイブズは潜在的に「本質的に仮構な存在」であり、その保存を語るなどは論理矛盾であるとすら形容される (Melot 1986)。デジタル革命は、これらのさまざまな展開を、厳密には作り出しているというより、むしろ拡大させ、加速させ、その様相を常に変化させていると言えよう。つまり、原因というよりもむしろ兆候なのである。

アーキビスト養成の領域で議論せねばならない問題は、教育体制ではない。フランスでは、過去 25 年間に全面的な重要性を獲得したさまざまな変化により、教育体制は充実したということすらできるのである。現在もはや一つではなく、複数の教育体制が存在し、全体としてそれらは、統合概念としても、内部構成を分析しても、ある種の均質性を保っているといえる。これらの教育組織は、一つの同じ源から多くのものを受け継いでいる、一つの教育の場をなしているからである。関係者の大多数が、フランス・アーカイブズ協会およびフランス語圏アーカイブズ学国際ポータル研修担当者、さらには文書学校を卒業して大学でアーカイブズ学を教えている者なのである。この意味で、文書学校は、1961 年に校長ピエール・マロが宣言したように、フランスにおける「アーカイブズの母」であり続けている。真の問題は、おそらく文書学校、大学、文化遺産機構、さらにはさまざまな研修制度の間の役割の調整ではない。というのも、ここでも他の領域と同じく、一人こもって悦に入るわけにはいかず、重なり合いや欠落は避ける必要があるのはもちろんだとしても、重要なのは、学生たちと公権力に対して、最良のサービスを提供し続けることにある。

教育内容の再分類についてよく考えられた例として、もちろん内容は変化を要求し続けるとはいえ、文書学校のカリキュラムが挙げられる。2006 年には、「歴史学のための

新しい応用テクノロジー」と題する修士課程プログラムが開始された。この修士課程教育は、歴史学の研究と普及のために有用な新しい技術の習熟教育として構想されたが、アーカイブズ学に重点がある「近現代アーカイブズコース」（現在は単に「アーカイブズコース」）を含んでいる。実際のところ、このコースの学位取得者には、文書館の専門職員のキャリアが直ちに開かれているのであるが、実は、有利な点と不利な点とがあり、これらは20世紀を通じて、文書学校の正規コース「アーキビスト・パレオグラフ」学位取得者について指摘されてきた事項と同様である。つまり、基礎教育としては大変充実しているが、現代アーカイブズ管理の職業現場での経験が不足しているという批判である。これに対しては、2020-2021年度から、修士課程の二年次が「レコードマネジメント」により専門特化する新しいコースの開設が予定されており、これは、正規コースである「アーキビスト・パレオグラフ」コースの学生教育の枠組みにおいて同じく予告されている、このテーマに関する強化とも連携するものである。これらの改革は、学術的な教育と職業的な研修との組み合わせの順序や編成秩序を変更するものではないが、暗黙裡には、改革に懸念を表明する者たちへの対応ともなっている。つまり、レコードマネジメントのようなテーマは、歴史学研究に基礎を持つ大学教育には不適合ではないかという懸念である。現状では、今回の改革は、それ自体として意図は明快であり、かつ各方面からの合意の結果であるとだけ指摘しておこう。

アーキビストの定義は、担う責任のレベルで異なるわけではもはやなく（部署の大小、国家規模か地方自治体レベルか。公的あるいは私的セクターか、など）、また、対象となる資料の年代によるわけでもない。ちなみに、19世紀にそうであったように、古文書を対象とする歴史研究者と、より新しいアーカイブズの処理担当者を分けようと考えていた時代もあった。逆に、最近アーキビスト職内部の違いを生み出す要因として新たに現れてきたのは、上流あるいは下流におけるアーキビストの職務の細分化である。この事自体は、決して新しいことではなく、すでに述べたように、前アーカイブズ化作業のために、資料生産のもっとも早い段階からアーキビストを介在させる必要性が感じられた半世紀ほど前から存在した認識であった。デジタル革命の全般的な影響のもとで、アーキビストの職務の職業上の選択肢は大きく変容した。それはここで問題としているアーカイブズは、もはや生成から廃棄、永久保存のすべての段階において、いつも同一の性格を持つわけでないと考えられるに至っているからである。

電子環境でのアーカイブズ生産が一般的になったことは、歴史的な素養は必要なくなり、情報技術者がいけばよいことを意味するわけではない。求められている省察や解決

策は、歴史補助学（文書学、言語学、法制史など）に精通する歴史学研究者が提示、あるいは他の研究者よりもよりよく提示できるものである。電子データの時代でもアーカイブズは存在するが、そのあり方は根本的に考え直されなければならない（Banat-Berger/Nougaret, 2014）。今後、アーキビストは、一つ一つのデータあるいは情報、資料さらには箱を管理するのではなく、（及ぼす効力および対応力の双方で）非常に長期にわたるダイナミックなプロセスを管理せねばならない。その役割とは、したがって、ジェンキンソンがかつて考えたような、行政実務から距離を置くという、彼が慣れ親しんだ考え方も、情報学の関心とも異なる。後者の目的は、そもそも、多かれ少なかれ長期にわたる保存を確保することには向けられていない。これからは、破棄が一般的、保存は例外なのである。

未来のアーキビストは、確かに、それがどのような形態のものであろうと、資料を未来に受け渡していく存在であり続けるであろう。しかしながら、このためには、不可避免的に、アーカイブズ生産の鎖に非常に早い段階から介入せねばならない。しかも、これは単に資料のアーカイブズ化だけではなく、資料という概念自体の根源における意味で理解されねばならない。資料が一定量きちんと最終的に保存されるためには、やってくるものを受け入れるだけでは不十分なのである。ここでは、世界中の公行政を襲っている資料量の莫大な増加という恐るべき事態に対する実務的な対応を問題としているわけではない（アーカイブズが多ければ多いほど、対処の手段は限られる）。この課題に対しては、生産の段階で処理の分類を決めておき、それ以降の段階では、もはや頭を悩ませないというやり方があるだろう。変化は、まずアーカイブズの作成で生じる。デジタル・アーカイブズ（および、それが依然として重要性を持ち続けている紙媒体資料としても延長して作成されるもの）は、それ自体としては文字あるいは単語でしかないデータと、それに意味を与えるソフトウェアの結合によって無限に生成が繰り返されるものでしかない。ソフトウェアとは、丁度、中世文書を構成する諸形式にあたり、獣皮紙の支持体やインク、言語、語彙、用語法、そして印章などがそれにあたる。しかしながら、再度言うが、「デジタル物体は、それ自体としては存在しない」のである（Banat-Berger/Nougaret, 2014）。デジタル環境で生成するあらゆる資料が、永久保存のアーカイブズとなるわけではない。そうするためには、始めから特例として定めておかねばならず、それは、アーキビストが、その完全な保存（変容や改竄が行われていないこと）が価値あることを示すことによって正当化される。そして、その目的とは、証拠の提出、および将来の歴史学研究のための資料収集である（Ricard 2018）。

「アーキビストが取り組む課題とは、収集する対象のなかで、資料を構成する諸要素を同定し、それらをさまざまな手続きやプロセスと結びつけることである。他方、長らく分類システム（一件書類の構成、分類秩序、同定作業、一件書類維持の規則など）によって支えられてきたこの絆は、現在、特に構造化されていない資料生産に関しては、しばしば緩んでいるのである。」（D'Angio-Barros L'Houmeau Vasseur 2013）

アーカイブズのステータス自体が動揺していることから、今後アーキビストの活躍する場とは、もはや行政の執務室だけではなく、ある意味では、資料の電子管理の道具立て開発者の脳細胞にあるともいえる。さらに、資料自体もまた、実務管理のますます広がる領域をカバーすることになるだろう。「作成する」*créer* が、アーキビストの職務を構成する5番目の用語となるかもしれない。この職業を律する他の4つ（収集、分類、保存、公開）との間のかなり大きな違いこそ、この職業、そして養成に関する爆発的解体現象を引き起こした原因であるようにも思える。実際のところ、アーキビスト職は、非常に均質緊密な存在をなしており、アーカイブズがある場所や資料生産者と結びついているほどには、特定のポストに固定化されているとはいえない。さまざまな手続全体に関する幅広い視野を持つこと、つまりより確固としたやり方で、アーカイブズの3段階全体を掌握することが、現在ほど求められている時代は他にはないといえる。いわば木と樹皮の間に閉じ込められてきたアーキビストは、いまや、しばしば短期的な観点からなされる組織的な命令処置（ある電子資料管理プロジェクトが構想されると、先行のシステムは廃棄される）と、資料へのアクセスを要求する社会的な要請（私生活および権利の証拠の保全に関する要請）の双方をコントロールする必要があるのである。これらの要求は、全面的に対立するものではなく、法的および歴史的な諸要因がからまって、ここでもまた、アーカイブズの必要性を支持することになる。

「アーカイブズ管理機関とは、国家や市民の長期にわたる記憶の管理人であり保証人でもある。その第一のミッションは、それゆえ、諸権利の行使や歴史研究のためにアーカイブズ化された資料やデータを、時をこえて保存し、後世に伝えることなのだ。アーカイブズの輪郭をこのように明確にしておくことは、アーカイブズ管理行政行為を強化し、正当化するためにも不可欠である。このことは、紙媒体であれデジタルであれ、持続的な、つまり適切で、永続的かつコスト管理された収集のまさに条件ですらある。同

時にまた、アーカイブズのすべての利用者に、個人的権利に関する新しい保護規定に則って、平等なアクセスを保証することでもある。」 (C. Nougaret, 2017)

情報は短い時間のなか、ときには一瞬の間に位置づけられるものであったとしても、アーカイブズは、はるかに豊かな時間性を有している。時間は歴史学研究に内在するが、アーキビスト養成のなかでの歴史学の重みは、かつてないほどの重要性を持つに至っており、歴史学研究は、アーキビスト養成のための素晴らしい道の一つであり続けている。というのも、アーキビストは、決定や活動、データプログラムやその読み取りの陳腐化が加速する社会にあって、長期的な視野を最重要なものとする仕事を担う存在であるからである。あらゆる動きが、この職の脊椎を構成するのは歴史学的素養であることを示している。さまざまな言葉と技術、そしてそれらの諸前提はひとつのものであるからである。文書学の諸規則に精通したアーキビストは、新しい環境に移動してもなんの困難も感じないであろう。新しい環境にあっても、以前と同じく、真正性、信頼性、正確性を尊重するという必須の業務に従事することになるが、これこそ、資料の文書学的分析の基礎をなすものである (Bonat-Berger Nougaret 2014)。さらに、アーキビストは、かつて19世紀なかばにはそうであったように、未来の歴史家の道案内人となるであろう。明快で信頼すべき研究道具を駆使して、知的に過去を再現するというアーキビストの能力は、過去に関心を有する者が、すでに数十年前からそうであったのだが、ますます操ることが難しくなる、途方なく膨大な資料の塊のなかを、確かなやり方で進んでいくことを助けるために、まず発揮されるのである (Joly 1986)。これに加えて、デジタル・アーカイブズ生産の諸規則に習熟することは、アーカイブズ概念の鎖の全過程を辿り直すことでもあるが、その助けをするのがアーキビストであり、彼はますますアーカイブズの共同生産者に近づくのである。

これまで述べてきたことすべては、アーキビストを、他の職（といっても、どんな職なのだろうか）に置き換えようとするのではなく、逆に、電子データの世界において、アーキビストが長らくその発展に貢献し、さらに拡大させてきた歴史学的基礎が、永続的なアーカイブズの確保のためには重要である、との認識を強めているといえる。そして、永続的なアーカイブズ管理こそが、公権力と同時に、全体としての社会に対する貢献なのである。

Bibliographie :

- ANHEIM (Étienne) et PONCET (Olivier), « Fabrique des archives, fabrique de l'histoire : présentation », dans *Revue de Synthèse*, 5<sup>e</sup> s., t. 125 (2004), p. 1-14.
- AULARD (Alphonse), « Chartistes et archivistes », dans *L'Aurore*, 16 avril 1906, p. 1.
- BANAT-BERGER (Françoise), NOUGARET (Christine), « Faut-il garder le terme archives ? Des « archives aux données » », dans *Les archives, aujourd'hui et demain*, numéro spécial de *La Gazette des archives*, n°233 (2014), p. 7-18.
- COUDRET (Sabins), DELTOUR (Jean-Pierre), FERNIQUE (Adrien), VIALLE (Coline), « Regards croisés sur l'archiviste numérique : entre rupture et continuité », dans *Les mutations du métier d'archiviste et de son environnement*, numéro spécial de *La Gazette des archives*, n°244 (2016), p. 233-244.
- D'ANGIO-BARROS (Agnès), L'HOUMEAU (Hélène), VASSEUR (Édouard), « L'archivage électronique dans l'administration publique : expérience croisées de trois services d'archives ministériels dans le contexte réglementaire des archives publiques », dans *Quand l'archivage devient électronique*, p. 80-98, en ligne [https://www.diplomatie.gouv.fr/IMG/pdf/Actes\\_colloque\\_AE\\_fevr-2013\\_diffusion\\_numerique\\_cle04a718.pdf](https://www.diplomatie.gouv.fr/IMG/pdf/Actes_colloque_AE_fevr-2013_diffusion_numerique_cle04a718.pdf)
- DELMAS (Bruno), « Trente ans d'enseignement de l'archivistique en France », dans *Les archives françaises à l'horizon de l'an 2000*, numéro spécial de *La Gazette des archives*, n°141 (1988), p. 19-32.
- DELMAS (Bruno), « Naissance et renaissance de l'archivistique française », dans *Les archives en France*, numéro spécial de *La Gazette des archives*, n°204 (2006), p. 5-32.
- Direction des Archives de France, *La pratique archivistique française*, Paris, 1993.
- GALLAND (Bruno), « La participation de l'archiviste à la recherche historique : un rôle à redéfinir ? », dans *La Gazette des archives*, n°204 (2006), p. 211-232.
- HILDESHEIMER (Françoise), « Échec aux Archives : la difficile affirmation d'une administration », dans *Bibliothèque de l'école des chartes*, t. 156 (1998), p. 91-106.
- HILDESHEIMER (Françoise), « Les Archives nationales au XIX<sup>e</sup> siècle. Établissement administratif ou scientifique ? », dans *Histoire et archives*, 1 (1997), p. 105-135.
- JOLY (Bertrand), « Les archives contemporaines ont-elles un avenir ? », dans *La Gazette des archives*, n°134-135 (1986), p. 185-194.
- JULLIEN (Benoît), VIGIER (Fabrice), « Une formation souple et originale ? Le diplôme universitaire « Archives et métiers des archives » de l'université de Poitiers », dans *Les mutations du métier d'archiviste et de son*

*environnement*, numéro spécial de *La Gazette des archives*, n°244 (2016), p. 117-137.

*L'École nationale des chartes, histoire de l'École depuis 1821*, Thionville, 1997.

MELOT (Michel), « Des archives considérées comme une substance hallucinogène », dans *Traverses*, n°39 (1986), p. 14-19.

MIROT (Albert), « La formation des archivistes en France », dans *La Gazette des archives*, n°21 (1957), p. 35-41.

MOLLET (Vincent), « Les archivistes dans les archives départementales avant le décret de 1850 », dans *Bibliothèque de l'École des chartes*, t. 151 (1993), p. 123-154.

MONICAT (Jacques), « Le recrutement et la formation professionnelle des conservateurs d'archives en France », dans *La Gazette des archives*, n°34-35 (1961), p. 131-138.

NOUGARET (Christine), « L'École des chartes forme-t-elle encore des archivistes ? », dans *La Gazette des archives*, n°208 (2007), p. 23-29.

NOUGARET (Christine), *Une stratégie nationale pour la collecte et l'accès aux archives publiques à l'ère numérique Rapport à Madame Audrey Azoulay, ministre de la Culture et de la Communication*, [Paris], 2017.

OUTREY (Amédée), « Sur la notion d'archives en France à la fin du XVIII<sup>e</sup> siècle », dans *Revue historique de droit français et étranger*, 1953, p. 277-286.

PEROTIN (Yves), « L'administration et les trois âges des archives », dans *Seine-et-Paris*, n°20 (1961), p. 1-4.

« Projet de réorganisation des Archives de France », dans *Bibliothèque de l'École des chartes*, t. 65 (1904), p. 290-308.

RICARD (Bruno), « La RGPD et les archives », dans *Droit(s) des archives*, billet du 21 juin 2018 en ligne <https://siafdroit.hypotheses.org/792>

SAMARAN (Charles), « Leçon d'ouverture du cours de bibliographie et d'archives de l'histoire de France à l'École des chartes (8 novembre 1933) », dans *Bibliothèque de l'École des chartes*, t. 94 (1933), p. 95-115.

### Sitographie

Association des archivistes français : <https://www.archivistes.org/-Formations->

École nationale des chartes : <http://www.chartes.psl.eu/fr/enseignements>

Formations universitaires : <https://francearchives.fr/article/38055>

Institut national du patrimoine : <http://www.inp.fr/Formation-initiale-et-continue/Formation-des-conservateurs>

Portail international d'archivistique francophone : <http://www.piaf-archives.org/tous-les-cours>